

猪名寺 と 謎の古代豪族・猪名氏

猪名寺廃寺跡(いなでははいじあと)

猪名寺乱太郎は、アニメ『忍たま乱太郎』および、原作『落第忍者 乱太郎』の主人公として多くの人が知る所です。さらにJR福知山線の駅として「猪名寺」は身近にあります。「猪名寺廃寺」は、飛鳥時代後期から室町時代にかけて存在した寺院が廃寺となって、猪名寺という地名を冠したことに由来します。一帯は標高10mの洪積台地（伊丹台地）の先端部分にあたり、小高くなっています。

JR猪名寺駅から北東にある旧村の小さな森に「摂津国 猪名寺廃寺址」の石碑が建てられ、その証を残します。その森を背景として法園寺（ほうおんじ）のお堂と庫裏が建ち、遺跡地の一部には佐璞丘（さぼくがおか）公園という児童公園が設けられています。法園寺境内を廃寺址に含めるか否かは、見解が分かれるところです。さらに、遺跡地の前の道を東にゆるやかに左へ曲がって下ると、藻川の堤に出ます。猪名寺の規模は現地形から方1町半（約160m四方）と推定され、これまでの発掘調査の結果、東に金堂、西に五重塔、これらを回廊が囲み、伽藍配置が法隆寺とほぼ同じの寺院であったことがわかっています。付近から出土した瓦は、飛鳥の川原寺で使われたものと同じ様式（川原寺式）であることから、寺の創建時期は7世紀後半とみられます。伽藍は天正6年（1577年）の荒木村重（伊丹、花隈、尼崎など35万石を有した織田家でも有数の武将で信長に逆らい謀反）と織田信長の戦乱により焼失し、廃寺になったと推定されています。尼崎市北部から伊丹市にかけての猪名川流域は、古くから猪名野または稲野と呼ばれた地域です。

「猪名」の由来

『日本書紀』には、新羅王から船造りの技術者が派遣され、住まわされたことが記され、猪名部御田（いなべのみた）という人物の名前が見られます。猪名部御田は、新羅国から「船を焼いた代償として送られてきた帰化人の子孫」だろうといわれています。彼は建築・造船などの木工技術に大変優れていて、船造りだけでなく宮殿建設に関わるなど、大活躍しました。非常に高い所にある柱の上でも、まるで猿が走るように身軽に動き回っていたそうです。「猪名部」の姓は、大和朝廷の職業部民の一つである「猪名部」または「為奈部」に属したことから付けられました。

猪名部御田や猪名部真根（まね）をはじめとして、猪名部一族は、優れた木工技術者集団でした。天平勝宝4（752）年、名工・猪名部百世（ももよ）は、飛驒の匠らを指揮し、奈良の東大寺大仏殿を建立しました。現在、世界遺産に指定されている法隆寺、興福寺などの建設にも関わっています。平安時代の『新撰姓氏録』では為奈部首（いなべのおびと）や猪名部造（みやつこ）という人が登場します。「猪名部」は猪名地域に居住した豪族・猪名氏が管掌する木工技術者集団の名前に由来します。部首、部造は共に物部氏の同族と称していて、「日本書紀 雄略18年条」に猪名部が物部氏の所有とあることと合わせ、物部氏の管理下にあったとみられています。つまり猪名部氏は新羅からの帰化人で、その後に物部氏の配下で「物部の血を受け継ぐ支系一族」と称した可能性が考えられます。が、真相は不明です。

猪名川町（兵庫県）、稲部町（滋賀県）、いなべ市（三重県）、伊奈町（愛知県）、伊那市（長野県）…これらの地には、猪名部に由来する史跡が、それぞれに残されています。猪名部は、当地で一族子孫を繁栄させたり、地域の木工職人を育て上げたりするなどの功績を残しました。「伊賀の木工」もそのひとつです。このように、飛鳥時代以来、謎の古代豪族・猪名氏は、地名に「いな」という2文字を残しながら畿内から各地に広がっていったのです。「猪名」の一語をたどれば、そこには古人の輝きや栄華、夢や謎がうかがい知れます。

参考資料 ★毎日新聞2016年7月4日 愛知県地方版 歴史ウォーカー:95 古代豪族・猪名部氏ゆかりの東員町を歩く★猪名寺廃寺跡 - Wikipedia ★「図説 尼崎の歴史-古代編」尼崎市立地域研究史料館★世界大百科事典 第2版 平凡社「猪名寺」